

# 日本語教育研究の現状と展望

金志宣\*

## <Abstract>

### Current trends and prospects of studies on Japanese language education

This paper examined current trends and prospects of recent research on Japanese language education in Korea. From 2019 to 2020, 321 papers on Japanese language education were selected from 19 Japanese and Japanese-related academic journals. Next, research topics were divided into 10 categories and sub-categories. The results revealed that the highest proportion of papers were related to “teaching and learning” (24.9%), followed by “language elements” (20.9%), “social language or culture” (9.0%), “teachers or learners” (8.7%), “acquisition or error” (8.1%), “language skills” (7.2%), “textbooks or teaching materials” (5.9%), “others” (5.9%), “Japanese language education general” (5.0%), and “evaluation” (4.4%). Further, this study examined in detail the research related to “online education or the use of ICT,” which is expected to become more important and necessary in the future and has already been focused in the field of Japanese language education. It is hoped that the study results could provide the direction of Japanese language education and research, and class design and implementation in the educational environment that often changes dynamically in this uncertain era.

Field: Japanese Education

Keywords: Current Trends and Prospects, Japanese Language Education, Teaching and Learning, Online Education, Information and Communication Technology

## 1. はじめに

本稿は、韓国の日本語教育における近年の研究動向を探ったものである。本学会誌『日本語学研究』では、第51輯（2017.3）より2年ごとに、6つの分野（①音声学・音韻論、②語彙論・意味論、③文法、④語用論・社会言語学、⑤日本語史、⑥日本語教育）の研究動向と展望について述べるレビュー論文の企画を行っている。そのうち、⑥日本語教育に関しては、早矢仕（2017）が2015～2016年に発表された論文をレビューし、趙南星（2019）が2017～2018年の論文をレビューした。ひきつづき、本稿では、2019年から2020年にかけて発表された日本語教育研究論文を取り上げ、その現状と展望を試みる。

まず、日本・日本語関連学術誌<sup>1)</sup>に掲載された日本語教育研究論文を選び出し、テーマによる分類をもとに2019年から2020年までの研究動向を概観する。とりわけ、今年初めから日本語教育を含めた教育界で最も注目され、これからますます強調されていく非対面オンライン教育の研究に焦点をあて、その

\* 梨花女子大学校 副教授、日本語教育

1) 日本・日本語関連学術誌には、日文学、日本文学、日本語学、日本語教育に関する論文が掲載されている。

現状を踏まえた上で今後を展望する。そうすることで、ブーカワールド (VUCA World)<sup>2)</sup>といわれるような、不確実で不安定、かつ将来の変化を予測することが困難な、今日の社会に備えた教育のあり方を模索するきっかけとしたい。

## 2. 分析対象と方法

本稿では、前述したように、2019年から2020年まで韓国で発行された日本・日本語関連学術誌の掲載論文の中で、日本語教育研究論文を分析対象とした。学術誌および論文の選定には、趙南星 (2019) をもとにし、韓国研究財団の韓国学術誌引用索引サイトKCI (Korea Citation Index) の学術誌検索<sup>3)</sup>や学会・研究所のホームページを利用した。表1のとおり、19種の学術誌に2063本の論文が掲載され、そのうち日本語教育研究論文は321本で全体の15.6%を占めていた。日本語教育研究論文の著者の分布をみると、韓国人著者の論文が235本 (73.2%)、日本人著者の論文が66本 (20.6%)、その他 (中国人著者・台湾人著者・多国籍共同著者の論文) が20本 (6.2%) であった。

〈表1〉日本・日本語関連学術誌別の論文数<sup>4)</sup>

| 学会名／研究所名『学会誌名』（創刊年度） |    |                          | 総論文数 | 日本語教育研究論文数 |
|----------------------|----|--------------------------|------|------------|
| 学<br>会               | 1  | 韓国日本学会『日本学報』（1973）       | 114  | 10         |
|                      | 2  | 韓国日語日文学会『日語日文学研究』（1978）  | 140  | 16         |
|                      | 3  | 韓国日本語教育学会『日本語教育』（1984）   | 104  | 29         |
|                      | 4  | 大韓日語日文学会『日語日文学』（1991）    | 138  | 28         |
|                      | 5  | 日本語文学会『日本語文学』（1992）      | 186  | 29         |
|                      | 6  | 韓国日本語文学会『日本語文学』（1995）    | 122  | 20         |
|                      | 7  | 韓国日本文化学会『日本文化学報』（1996）   | 158  | 26         |
|                      | 8  | 韓国日語教育学会『日本語教育研究』（1999）  | 96   | 65         |
|                      | 9  | 東アジア日本学会『日本文化研究』（1999）   | 112  | 14         |
|                      | 10 | 韓国日本語学会『日本語学研究』（1999）    | 76   | 29         |
|                      | 11 | 韓国日本近代学会『日本近代学研究』（1999）  | 136  | 6          |
|                      | 12 | 東北亜文化学会『東北亜文化研究』（2000）   | 155  | 4          |
|                      | 13 | 韓国日本言語文化学会『日本言語文化』（2002） | 113  | 14         |
| 研<br>究               | 14 | 中央大学校日本研究所『日本研究』（1979）   | 49   | 7          |
|                      | 15 | 東国大学校日本学研究所『日本学』（1979）   | 65   | 5          |

2) VUCAとは、Volatility(変動性)、Uncertainty(不確定性)、Complexity(複雑性)、Ambiguity(曖昧性)の頭文字を合わせたもので、1990年代後半に米国で軍事用語として発生したが、2010年以降ビジネス業界にも広がった。今や軍事やビジネスに限らず、教育界を含む社会全般に通用するものとなっており、この状況は今後ますます加速化することが予想される(斉藤 2016；當作 2019；金 2019)。

3) 韓国学術誌引用索引 (<https://www.kci.go.kr/kciportal/main.kci>)

4) 表中の1-19は、学術誌の創刊年度順に並べたものである。

|   |    |                               |      |     |
|---|----|-------------------------------|------|-----|
| 所 | 16 | 韓国外国語大学校日本研究所『日本研究』 (1990)    | 87   | 4   |
|   | 17 | 檀国大学校日本研究所『日本学研究』 (1997)      | 56   | 4   |
|   | 18 | 高麗大学校グローバル日本研究院『日本研究』 (2002)  | 49   | 2   |
|   | 19 | 漢陽大学校日本学国際比較研究所『比較日本学』 (2009) | 107  | 9   |
| 計 |    |                               | 2063 | 321 |

日本語教育研究論文は、テーマによって10分野に分け、さらに下位分類を行った<sup>5)</sup>。その際、各論文のタイトル、キーワード、要旨をもとに判断したが、不明なものは本編に当たった。複数の分野にまたがるような論文は、内容的に重点が置かれた一つの分野に分類した。10の分野と下位分野は、1.言語要素 (1-1.音声・発音、1-2.文字・表記、1-3.語彙、1-4.文法、1-5.談話・文章)、2.言語技能 (2-1.会話、2-2.作文、2-3.聴解、2-4.読解) 3.社会言語・文化 (3-1.敬語・待遇表現、3-2.文化・日本事情、3-3.異文化・多文化)、4.教授・学習 (4-1.教授法・授業実践、4-2.ICT活用・オンライン授業)、5.評価、6.習得・誤用、7.教科書・教材、8.教師・学習者、9.日本語教育一般 (日本語教育(学)の動向・展望・提言)、10.その他 (就職・生涯教育・通翻訳・日本語教育史など) となる。

### 3. 分析結果と考察

#### 3.1 日本語教育研究の動向 (2019～2020年)

表2は、日本語教育研究における各分野の論文数とその割合をまとめたものである。日本語教育研究論文を分野別にみると、4.教授・学習 (24.9%・80本) および1.言語要素 (20.9%・67本) の割合が高く、両分野を合わせて45.8%と全体の半分近く占めていることが分かる。残りの54.2%は、3.社会言語・文化 (9.0%・29本)、8.教師・学習者 (8.7%・28本)、6.習得・誤用 (8.1%・26本)、2.言語技能 (7.2%・23本)、7.教科書・教材 (5.9%・19本)、10.その他 (5.9%・19本)、9.日本語教育一般 (5.0%・16本)、5.評価 (4.4%・14本) の順に占められていた。

5) 分類に際し、西口(2012)の「日本語教育研究に関するテーマ」と趙南星(2019)の「日本語教育研究分野」を参照した。

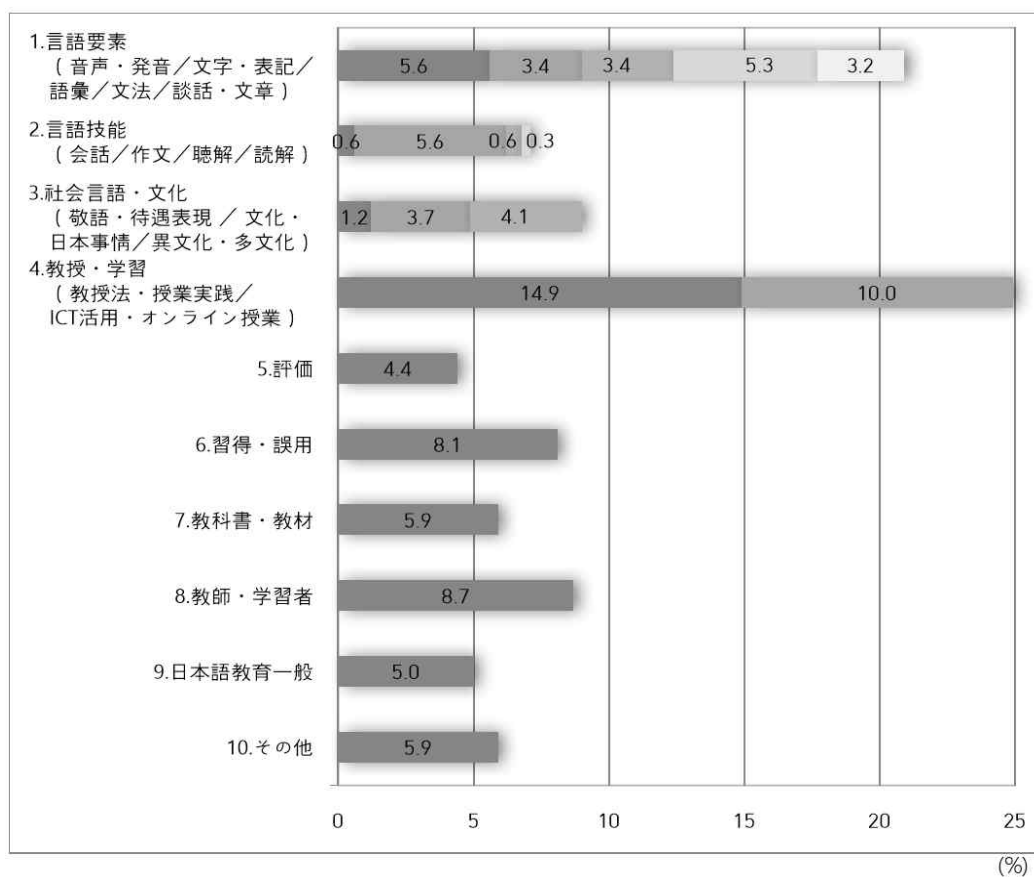
〈表2〉日本語教育研究の分野別論文数と割合

| 分野                            |                    | 論文数(本) | 割合(%) |
|-------------------------------|--------------------|--------|-------|
| 1. 言語要素                       | 1-1. 音声・発音         | 18     | 5.6   |
|                               | 1-2. 文字・表記         | 11     | 3.4   |
|                               | 1-3. 語彙            | 11     | 3.4   |
|                               | 1-4. 文法            | 17     | 5.3   |
|                               | 1-5. 談話・文章         | 10     | 3.2   |
|                               | 小計                 | 67     | 20.9  |
| 2. 言語技能                       | 2-1. 会話            | 2      | 0.6   |
|                               | 2-2. 作文            | 18     | 5.6   |
|                               | 2-3. 聴解            | 2      | 0.6   |
|                               | 2-4. 読解            | 1      | 0.3   |
|                               | 小計                 | 23     | 7.2   |
| 3. 社会言語・文化                    | 3-1. 敬語・待遇表現       | 4      | 1.2   |
|                               | 3-2. 文化・日本事情       | 12     | 3.7   |
|                               | 3-3. 異文化・多文化       | 13     | 4.1   |
|                               | 小計                 | 29     | 9.0   |
| 4. 教授・学習                      | 4-1. 教授法・授業実践      | 48     | 14.9  |
|                               | 4-2. ICT活用・オンライン授業 | 32     | 10.0  |
|                               | 小計                 | 80     | 24.9  |
| 5. 評価                         |                    | 14     | 4.4   |
| 6. 習得・誤用                      |                    | 26     | 8.1   |
| 7. 教科書・教材                     |                    | 19     | 5.9   |
| 8. 教師・学習者                     |                    | 28     | 8.7   |
| 9. 日本語教育一般（日本語教育(学)の動向・展望・提言） |                    | 16     | 5.0   |
| 10. その他（就職・生涯教育・通翻訳・日本語教育史など） |                    | 19     | 5.9   |
| 計                             |                    | 321    | 100   |

表2を図示したのが、次頁の図1である。この図をみると、日本語教育研究の中で、4.教授・学習に関するものが全体の24.9%で最も多くなっていることが見て取れる。趙南星（2019）の調査でも同様の結果が得られたことから、ここ数年の日本語教育研究の動向がうかがえる。今回は、4.教授・学習分野をさらに、4-1.教授法・授業実践、4-2.ICT活用・オンライン授業に分けているが、4-1.には主に新たな試みとして教授法や学習活動を取り入れた授業実践の報告・研究が見られ、4-2.にはLMS、SNS、WEB、AIなどICTを活用した授業や、MOOCをはじめE-Learning、Blended Learning、Flipped Learningなど、さまざまな非対面型・対面型（オンライン・オフライン）の教育研究が見られる。이경수（2012）は、2000年以降コンピューターやインターネットなどを活用した遠隔教育が目立つようになったと指摘しているが、こうしたICTを活用した授業や非対面のオンライン授業に関する研究は、昨今の社会事情<sup>6)</sup>とも相まって今後さらに広がることが予想される。したがって次節では、この4-2.ICT活用・オンライン授業に

6) 新型コロナウイルス（COVID-19）の感染拡大を防ぐため、韓国を含む世界中の教育機関で2020年度につき2021年度1学期も、遠隔教育の非対面授業（オンライン授業）あるいは混合型授業を余儀なくされている。

関するものを詳しく見ていく。



〈図1〉日本語教育研究の分野別論文の割合

### 3.2 ICT活用・オンライン授業に関する研究

遠隔教育の一形態であるオンライン授業は今に始まったわけではなく<sup>7)</sup>、1990年代に情報通信技術の発展・普及に伴いインターネットを介した教育手段として広く採用されるようになった。インターネットを利用したプラットフォーム (blackboard、Moodleなど) が多く開発され、複数の学習管理システム (LMS) が使われるようになったのである。さらに2000年以降、インターネットが現代社会の重要な基盤として定着し、メディア通信技術の向上とパソコンやスマホの普及が進む中で、教育分野もさらなる発展を遂げてきた。教育コンテンツやツールの提供、オンライン教育サイト (Coursera、Udacity、edX) での大規模オープンオンラインコース (MOOC) の開始など、様々な取り組みが行われている (古川

7) 遠隔教育の歴史は古く、1800年代にはすでに郵便や電話などの通信手段を用いて特定科目の遠隔教育が提供され、1900年代には通信技術の向上によりラジオやテレビ通信講座が行われていた。その後、1950,60年代にはコンピュータベースのトレーニングプログラムが開発・導入され、後年のコンピュータ支援教育 (CAI) やコンピュータベーストレーニング (CBT) に影響を与えた。それまでの通信教育システムは情報を提供するための一方向のものだったが、1970年代に入るとオンラインで双方向なものになり始めた (古川2020)。

2020)。そして2020年の今、多くの教育機関でWeb会議ツール（Zoom、Google Meetなど）を使用したオンライン授業が開講されている。こうしてICTを活用したオンライン授業は時間・空間の制限のない効果的な教育形態として根づき、教育の新たなパラダイムとして確立されつつある。

一方、韓国の場合、2020年以前はサイバー大学や放送通信大学校を除いたほとんどの大学ではオンライン授業の比重が授業全体の1%程度に過ぎず、教育パラダイムの動向に追いついていないのが現状であった（[卓재우 2020; 이동주・Misook Kim 2020]）。しかし、コロナ禍という非常時のもと、韓国を含む世界中の教育機関でろくに準備もできないまま否応なしにオンライン授業が始まり、これまで遅々として進まなかったICTを活用した学びやオンライン授業が急速に浮上している。日本語教育の方も例外ではなく、本調査で得られた結果、つまり日本語教育研究の中で4.教授・学習の4-2.ICT活用・オンライン授業に関するものが全体の1割を占めていることと無縁ではないだろう。このような現状を踏まえ、以下では日本語教育研究のうちICT活用・オンライン授業に関するものを、便宜上、同期型・非同期型オンライン授業、ブレンディッドラーニングとフリップトラーニング、ICTを活用した学習活動・授業、eラーニングの現状や課題・展望、その他に分けて概観する。

### 3.2.1 同期型・非同期型オンライン授業

オンライン授業は、リアルタイムに配信される画像・音声を視聴したり参加するなどの方法によって受講する同期型と、オンデマンドで配信された授業動画や音声つきスライド動画を視聴して課題に取り組むような非同期型に大別される。まず、同期型オンライン授業に関するものから見ていく。

峯崎・岩井（2020）<sup>8)</sup>では、大学の初級日本語の同期型オンライン授業の実践について報告し、教師である筆者らの振り返りをもとに、リアルタイムのオンライン授業の困難点と利点をまとめた。この論文では、コロナ禍により生じた全授業オンライン化という事態における教師の対応は、オンラインに適用しやすい教室活動とそうでない教室活動を識別し、オンラインに適した形へと変容を促すものであったとし、今回明らかになった利点を活かしつつ、オンライン授業に適した効果的な教室活動及び評価の方法を開発していくことを今後の課題としている。최정희（2020）<sup>9)</sup>では、大学の日本語会話・作文科目をリアルタイム遠隔授業で行い、学習者の質問紙調査によって対面授業と遠隔授業の満足度や長短所を調べた。その結果から、学習者の満足度が高められる遠隔授業には、対面授業との違いを認識した授業設計や、学習者のニーズに合わせたリアルタイム遠隔授業の実践とそれを支えるウェブサイトの構築が必要であるとしている。石塚（2020）<sup>10)</sup>では、作文のピア・レスポンスをライブ配信授業で実施し、質問紙調査を中心に学習者の肯定的・否定的意識について調べた。またライブ配信授業によるピア・ラーニングの授業が協働学習として成立するのかについても考察した。その結果、ピア・ラーニングでもライブ配信授業は実施可能であり、協働学習の基本要素は満たすことができるものの、どうしても越えられない距離感があるため、対面授業におけるピア・ラーニング以上のメリットがあると断定することは難しいとし、コロナ禍で対面授業が行えない状況下での代替的手段としては受け入れられるが、より効果的なピア・ラーニングとなるかについては今後さらなる実践研究の積み重ねが必要になると述べている。また、

8) 峯崎知子・岩井朝乃(2020)「大学の教養科目における初級日本語の同期型オンライン授業 - 対面授業との比較を通して探る特徴と課題」『日語日文学研究』115 韓国日語日文学会 pp.193-216

9) 최정희(2020)「학습자 만족도 향상을 위한 실시간 원격수업 교육 방안」『日本語教育』93 韓国日本語教育学会 pp.31-47

10) 石塚健(2020)「ライブ配信授業のピア・ラーニングにおける学習者の意識 - ピア・レスポンスの実践授業を通して」『東北亜文化研究』65 東北亜文化学会 pp.317-334

백이연 (2020) <sup>11)</sup>では、大学の日本語授業で非同期型と同期型オンライン授業の両方を順次に実施し、質問紙調査によって非同期型・同期型・ブレンド型に対する長短所や学習効果など学習者の認識を調べた。この結果をもとに、日本語授業に適した授業形態を探り、今後のオンライン授業の方向性を模索していきたいとしている。さらに、김영아 (2020) <sup>12)</sup>では、大学の日本大衆文化の理解という教養授業に Flipped PBL(Problem Based Learning)を取り入れ、非同期型と同期型オンライン授業を組み合わせで行った。授業前に学習動画で事前学習をすることで学習者が主体的に問題提起するようにし、授業中はグループ活動を中心にPBLを行い、授業後は課題に対するフィードバックを行った。コース終了後、学習者の満足度調査を通して授業における教師・学習者・システム上の問題点を見出し、考察している。これらの論文は、教師・学習者ともに馴染みのない同期型あるいは非同期型オンライン授業がどのように受け止められ評価されているか、そして今後どう向き合っていくべきかを探ったものと言える。

次は、非同期型オンライン授業、つまりオンデマンドで配信された授業動画や音声つきスライド動画を視聴して受講するようなサイバー大学やMOOCの講座に関するものである。八野 (2019) <sup>13)</sup>は、サイバー大学の教育現場における課題を提起し、ICTを活用した学習環境の改善に注目して学習者が自己の学習を選択管理していける環境づくりについて考察した。この論文では、ソーシャルメディアを活用したソーシャルラーニングについて提言しており、さらにLMSの学習行動データを利用した出席管理の方法や、LMSに蓄積された質疑応答に関するデータベースを活用した授業運営の実践について考察し、授業を総括的に活性化に導く方法を検討している。전영희・나유정 (2020) <sup>14)</sup>では、オープンサイバー大学 (Open Cyber University: OCU) におけるサイバー日本語講座の学習者を対象に質問紙調査を行い、学習者の動機とニーズに合わせたコンテンツづくりの必要性と方向性について述べている。박효경 (2020) <sup>15)</sup>では、サイバー大学の初級日本語作文科目にマイクロ・ラーニングを取り入れた授業を行い、コンテンツ構成と講義運営、作文添削、質問紙調査の結果について分析・考察している。강연화 (2020) <sup>16)</sup>では、日本文化芸術コンテンツ科目において事前に制作した動画を用いたサイバー講義 (非同期型オンライン授業) を行い、学習者の質問紙調査によってサイバー講義の効果および満足度を調べている。一方、戸田・千・伊藤 (2020) <sup>17)</sup>では、グローバルMOOCsにおける日本語発音オンライン講座 (Japanese Pronunciation for Communication: JPC) を受講した学習者と教師を対象に、学習者はJPCを通してどう学ぶか、教師はJPCを通してどう教えるかに着目し調査を行った。その結果から、JPCなどICTを活用した言語教育は、韓国の日本語教育現場における自律学習やブレンディッドラーニング、教師教育に有効である可能性が示唆されたとしている。

11) 백이연(2020) 「온라인 수업에 대한 대학생의 인식 조사-교양 일본어 수업을 대상으로」 『日本語教育研究』 52 韓国日語教育学会 pp.59-74

12) 김영아(2020) 「Flipped PBL기반 교양 '일본대중문화이해' 수업의 사례연구」 『日本語文学』 87 韓国日本語文学学会 pp.169-193

13) 八野友香(2019) 「韓国サイバー大学におけるICTと学習データの活用 - 韓国日本人語学習者を対象とした授業運営の事例を中心に」 『日本語教育研究』 51 韓国日語教育学会 pp.215-232

14) 전영희・나유정(2020) 「OCU 조금일본어 강좌에 대한 연구-사이버강좌 수강생의 설문분석을 통한 온라인교육 사례분석」 『日語日文学』 86 大韓日語日文学会 pp.101-121

15) 박효경(2020) 「사이버교육 성인학습자의 맞춤형 작문 학습에 관한 연구-H사이버대학교 조금작문수업의 사례를 중심으로」 『日本語文学』 84 韓国日本語文学学会 pp.45-66

16) 강연화(2020) 「사이버 강의 효과 및 만족도에 대한 연구」 『日本語文学』 84 韓国日本語文学学会 pp.3-20

17) 戸田貴子・千仙永・伊藤沙智子(2020) 「グローバルMOOCsにおける日本語発音オンライン講座 - 韓国人学習者および教師を対象とした調査から」 『日本語学研究』 63 韓国日本語学会 pp.39-55

## 3.2.2 ブレンディッドラーニングとフリップトラナーニング

ブレンディッドラーニングとは、複数の学びをブレンドして新しい学びを構築するもので、集合と個別、オンラインとオフラインなど授業形態の混合から、テキストや動画などコンテンツの組み合わせまで、ブレンドされる要素は様々である。最近、オンラインとオフライン（非対面・対面授業）のブレンディッドラーニングが注目されているが、김윤희 (2019) <sup>18)</sup>でも、対面授業とサイバークラスのブレンディッドラーニングを取り入れた観光日本語授業を行っている。ブレンディッドラーニングに対する学習者の満足度とその理由を調べ、その結果から、より効果的な学習のためには学習者のニーズに合わせたブレンディッドラーニングのコンテンツ開発と授業デザインが必要であるとしている。염미란 (2020) <sup>19)</sup>は、日本語教育にブレンディッドラーニングを導入するにあたって、大学連携型LMSを活用する方案について考察したものである。LMSの活用現況と学習者の認識調査を通じて、教養日本語授業にブレンディッドラーニングを導入する必要性があるという認識、学習資料の共有、学習の興味誘発など、個人的学習力量の強化に対する希望が高いことが確認された。期待できる学習効果として、教授者と学習者の相互作用や自己主導学習力量などが挙げられ、今後デジタルリテラシー能力の昇進に役立てる日本語入力教育や活動を取り入れる必要があると主張している。

次いで、フリップトラナーニングはブレンディッドラーニングの一つで、従来の授業形態を反転させたことから反転授業とも言われる。事前学習として講義動画を提供し自宅などで視聴するようにし、授業では活動やフィードバックに時間を充てるといった授業形態である。まず、곽은심・박재환 (2020) <sup>20)</sup>では、フリップトラナーニングを取り入れた初級日本語授業を行い、その効果について従来の対面授業と比較しながら検証し、学習者の満足度調査を通して教室内活動に対する学習者の認識を調べた。その結果から、フリップトラナーニングにおける学習者の動機づけや積極的な参加を促すようなコンテンツ開発と授業設計が必要であると述べている。권영성 (2019) <sup>21)</sup>では、フリップトラナーニングを取り入れた日本語授業を行い、その成果と問題点について質問紙調査をもとに分析・考察した。この論文では、学習者中心のフリップトラナーニングには、教室で学習者同士の相互作用を通じて創意的に問題解決できるような機会と経験を提供することが欠かせないとしている。一方、윤유찬 (2019a) <sup>22)</sup>は、効果的な日本文学教育のための教育方法として反転授業の適用方策を採用し、ハブルータ討論と目標基盤シナリオ方式を導入した授業事例を紹介した。윤유찬 (2019b) <sup>23)</sup>では、フリップトラナーニングの成功は適切な事前学習を提供することから始まるとし、日本文学教育のフリップトラナーニングに敵した事前学習用の資料を分類し、そのうちKOCW (Korea Open Course Ware) を事前学習資料として活用した授業事例を紹介している。また、手塚・高橋・森 (2019) <sup>24)</sup>では、日本語上級文法科目の反転授業（教室外の事前学習・教

18) 김윤희(2019) 「블렌디드 러닝의 학습자 니즈에 대한 일고찰—관광일본어 학습자의 설문지조사를 중심으로」 『日本研究』 50 中央大学校日本研究所 pp.27-47

19) 염미란(2020) 「교양일본어의 학습관리시스템(LMS) 활용 방안 연구-학습자의 역량형성을 중심으로」 『日本語文学』 85 韓国日本語文学会 pp.67-85

20) 곽은심・박재환(2020) 「플립러닝을 도입한 조금 교양일본어 수업의 실천연구 : 플립러닝의 학습효과와 교실내 활동에 대한 학습자들의 인식을 중심으로」 『日本語教育研究』 51 韓国日本語教育学会 pp.59-77

21) 권영성(2019) 「플립러닝을 적용한 일본어 수업의 실천연구」 『日本語教育研究』 48 韓国日本語教育学会 pp.5-21

22) 윤유찬(2019a) 「일본문학 수업에서 플립러닝의 적용」 『日本語文学』 84 日本語文学会 pp.187-207

23) 윤유찬(2019b) 「플립러닝을 적용한 일본문학 수업의 사전학습-사전학습 자료의 분류를 중심으로」 『日本文化学報』 81 韓国日本文化学会 pp.117-131

24) 手塚まゆ子・高橋薫・森朋子(2019) 「反転授業における相互作用のある対話の分析 - 日本語上級クラスの



室内の対面学習)を行い、学習者の話し合いのプロセスを分析・考察した。学習者は、グループワークでどのような話し合いのプロセスを経ているのか、話し合いがどう成果に結びつき、深まっているのかを調べ、反転授業を実施することによって生まれる教室活動の時間が、どのような意義を持つかについて述べている。

### 3.2.3 ICTを活用した学習活動・授業

ICTを活用した学習活動・授業の実践報告は様々であるが、まずSNSやアプリを使った韓日の遠隔交流に関するものから見ていく。西花恵子・松下由美子・坂本正(2019)<sup>25)</sup>は、日本人とのSNS交流に参加した韓国語学習者の口頭能力が伸びているかを調査したものである。交流の前後で実施したCan-Do Statementsのアンケートではあまり差は見られなかったが、満足度の調査では学習者がおおむね満足しているという肯定的な評価が得られたとし、交流の改善点として、授業外での交流の管理やSNSの媒体の選択、交流相手のマッチングなどを挙げている。及川・福島(2019)<sup>26)</sup>は、SNSを使用した日韓遠隔交流会の実践報告の中で、SNSツールを使用した言語学習の環境整備に向けた一つのケース・スタディとしての具体例を提示し、その成果と課題について述べている。青木咲野加(2019)<sup>27)</sup>では、スマートフォンのアプリケーション(Kakao TalkあるいはLINE)を利用した韓日遠隔交流を実施し、韓国語学習者にとっての遠隔交流の効果と問題点を挙げている。李恵正(2020)<sup>28)</sup>では、モバイルアプリを用いた日韓交流活動を行い、アンケート調査をもとに自発的な言語学習や文化交流におけるモバイルラーニングの有用性を検証している。

次は、WEBやグーグル翻訳を活用した教育に関するものである。한원형・이동욱(2019)<sup>29)</sup>では、日本語学習者が作文を行うとき、辞書などで得られた短編的な情報を自分が表現しようとする表現であるかどうかを、自ら判断して使用できるようにする方法として、WEB(Google)を活用する方法を紹介・説明している。박강훈(2019a,b)<sup>30)</sup>では、生成文法理論とニューラル機械翻訳(Neural Machine Translation)アルゴリズムの類似性について論じ、これをもとにニューラル機械翻訳エンジン(特にGoogle Translate)を活用した韓・日・英マルチリンガル教育モデルの構築と文法教育への適用を提案しており、その試みとして「テンスとアスペクト」の文法カテゴリーを中心に論旨を展開している。

その他、조대하(2020)<sup>31)</sup>では、最近、多くの日本語学習関連デジタルメディア・コンテンツにアク

---

文法科目を対象に」『日本語教育研究』49 韓国語教育学会 pp.39-54

25) 西花恵子・松下由美子・坂本正(2019)「SNS利用で会話能力が伸びるのか-Can Do Statementsと交流後の意識調査を基にして」『日本文化学報』81 韓国日本文化学会 pp.55-77

26) 及川ひろ絵・福島みのり(2019)「SNSを使用した日韓遠隔交流会実践報告-韓国語学習者にもたらされた作用について」『日本研究』51 中央大学校日本研究所 pp.69-93

27) 青木咲野加(2019)「SNSを用いた遠隔交流授業の有用性」『日本語文学』87 日本語文学会 pp.113-130

28) 李恵正(2020)「モバイルラーニングを活用した言語交流学習の実践-韓国の日本語学習者と日本の韓国語学習者を対象に」『日本語教育』91 韓国日本語教育学会 pp.1-15

29) 한원형・이동욱(2019)「WEB을 활용한 일본어 작문 지도」『日本学研究所』58 壇国大学校日本研究所 pp.225-244

30) 박강훈(2019a)「생성문법이론과 인공지능경망 번역 알고리즘-멀티링구얼 교육 모델에의 적용」『日語日文学研究』108 韓国日語日文学会 pp.3-22

박강훈(2019b)「인공지능경망 번역엔진을 활용한 멀티링구얼 문법 교육-한·일·영 삼중언어를 중심으로」『日本文化学報』80 韓国日本文化学会 pp.23-43

31) 조대하(2020)「디지털 리터러시를 활용한 일본어교육 연구」『日語日文学研究』114 韓国日語日文学会 pp.227-247

セスでき、学生のデジタルリテラシーも高くなっていると、それを活用した効果的な教授・学習活動を開発するための授業実践を行っている。최정희 (2020) <sup>32)</sup>では、映像資料（著者がテキストをもとに作ったアニメーション）を活用したストーリーテリング・シミュレーション活動を通し、学習者が自律的に学習内容を構造化し自分のものとして内在化（internalization）するよう試みた。강연화 (2019) <sup>33)</sup>では、MOOCモデルを活用した新しい日本語の指導法が言語習得に与える影響を明らかにするため、MOOCに対する学習者の認識を調べた。その結果から、日本語の学習や日本文化の理解などに効果的であり、肯定的に受け止められていることが分かったとしている。

### 3.2.4 eラーニングの現状や課題・展望

今回の調査では、韓国と日本におけるICT融合・複合の日本語教育の現状（尹楨勛 2020）、MOOCのプラットフォームを活用した日本語教育の現状と課題（박강훈 2020）、日本語教育におけるスマートラーニング・アプリケーションの現状と課題（황영희・박효경 2019）に関するものがあつた。

まず、尹楨勛 (2020) <sup>34)</sup>では、第4次産業革命時代の情報通信技術を融合・複合した日本語教育の現状を把握する目的で、日本と韓国の研究論文を調査・分析した。その結果から、両国とも様々なプラットフォームが開発・利用されているとし、日本ではVRのような高レベルの技術を用いた研究が出始めているのに対し、韓国ではm-Learningのようなモバイルベースの日本語教育が行われているとしている。全体として日本の方がより多く研究され、中でも開発や実践が特徴的であるのに対し、韓国では開発は全くなく、プラットフォームを活用した実践が中心となっているため、今後の研究が必要であると述べている。박강훈 (2020) <sup>35)</sup>は、MOOCのプラットフォームを活用した日本語教育の現状を踏まえ、著者が開発・運営中の日・英マルチリンガルMOOC講座の授業実践を報告し、MOOCプラットフォームを活用した日本語教育の展望と課題について述べた。韓国の大学ではMOOCの講座開発が増加しつつあるが、日語日文学専攻におけるMOOCの開発や研究は非常に少ないとした上で、MOOCのプラットフォームを活用した日本語教育の課題として、より実用的な教育内容と融複合教科課程の開発・運用、制作環境の改善、多言語による国際化への模索などを挙げている。また、황영희・박효경 (2019) <sup>36)</sup>では、日本語教育のスマートラーニングにおける日本語能力試験（JLPT）のモバイル・アプリケーションの現状を把握し、今後の設計・開発に要されるデザインと機能について考察した。既存のJLPTモバイル・アプリケーションには出題問題の重複、適切なフィードバックの不足、単語学習への傾きなどの問題点があり、実戦問題のアプリケーションが乏しいとしている。この現状を踏まえ、本格的なモバイル・アプリケーションの開発・運用のためには、まずプロトタイプの開発が必要であり、デザインや機能については学校と関連機関が共同でコンテンツを制作・活用しながら、相互作用の機能を備えたサービスを企画・開発していく必要があると述べている。

32) 최정희(2020)「스마트 세대 일본어 학습자를 위한 영상자료 활용 방안」『日本語教育』91 韓国日本語教育学会 pp.17-33

33) 강연화(2019)「MOOC 모델을 활용한 일본어교육」『日本文化学報』80 韓国日本文化学会 pp.5-22

34) 尹楨勛(2020)「ICT融・複合の日本語教育研究の現状 - 日本と韓国の研究を中心として」『日本語文学』86 韓国日本語文学学会 pp.137-156

35) 박강훈(2020)「MOOC 플랫폼을 활용한 일본어 교육의 현황과 전망-성인학습자의 日英 멀티링구얼 교육을 중심으로」『日本語文学』84 韓国日本語文学学会 pp.21-43

36) 황영희・박효경(2019)「일본어 스마트러닝 애플리케이션의 현황과 과제」『日本学報』120 韓国日本学会 pp.27-52

### 3.2.5 その他

上記のカテゴリーに入らないものとして、조치영 (2019a,b) <sup>37)</sup>が挙げられる。これらの論文では、日本語学部のIT融合教科の運営背景と戦略について概説し、「日本語アルゴリズム」科目の運営内容と日本語学部内の融複合の教科目間の連携を示し、その効果について述べている。

以上見てきたように、これまで経験したことのない教育環境のもと、それぞれの教育現場で創意工夫しながら計画を立て、実践し、それを振り返って、改善点を見つけては再び実践に挑むといった姿勢や意気込みが伝わってくる。勿論、残された課題は現場の数だけあると思われるが、中長期的にはオンライン環境の整備や著作権問題などの課題も解決していかなければならない。日本語教育を含む教育界が大きな転換機を迎えている中、もはやICT活用・オンライン授業のようなeラーニングは選択ではなく、必須の時代になったのかもしれない。いずれコロナ禍が終息したとしても、EduTechの勢いは衰えないだろう。これが、非常時のアドホックな対処に留まらず、長いスパンで地道に作り上げていく心構えと実践力が求められる所以である。

## 4. おわりに

本稿では、韓国の日本語教育における近年の研究動向と展望について述べた。2019年から2020年にかけて日本・日本語関連学術誌(19種)に掲載された日本語教育研究論文(321本)を選び出し、テーマによって10の分野と下位分野に分けて動向を探った。その結果、「教授・学習」に関するものが最も多くなっていたが、本稿では、2020年初めから日本語教育を含む教育界で注目され、今後さらに重要性和必要性が高まっていくことが見込まれる「ICT活用・オンライン授業」に関する研究に焦点をあてて概観し、その現状と課題を垣間見ることができた。ハイブリッドが新常态となりつつある今であるからこそ、対面授業と遠隔授業の利点を生かせる(喜連川 2020)ような取り組みが望まれる。本稿が、ダイナミックで不確実な時代を生き抜ける日本語教育・研究のあり方や授業デザイン・実践方法を模索する上で一助となることを期待したい。

37) 조치영(2019a) 「노동인구 감소에 따른 일본어학부에서의 IT융합교과 운영전략과 학생양성 방향 수립에 관한 고찰」 『日語日文学』 82 大韓日語日文学会 pp.61-79

조치영(2019b) 「일본어학부에서의 『일본어알고리즘』 IT융합교과 운영을 통한 학부경쟁력 강화 사례 연구」 『日本語文学』 86 日本語文学会 pp.155-178

## 【参考文献】

- 金榮敏(2014)「韓国における日本語学・日本語教育の現状と展望」『第9回国際日本学コンソーシアム「グローバルと日本学」』お茶の水女子大学 日本語学・日本語教育学部会 pp.1-8
- 金志宣(2019)「内省シートを活用した内省活動の効果－日本語教育における自律的学習の支援の観点から」『日本語教育研究』49 韓国日語教育学会 pp.5-21
- 도재우(2020)「면대면 수업의 온라인 수업 전환과정에서 발생하는 설계 장애물에 대한 탐색」『교육문화연구』26(2) 인하대학교 교육연구소 pp.153-173
- 이강민(2012)「한국에서의 일본어학 연구-현황과 과제」『日本学報』91 韓国日本学会 pp.1-8
- 이경수(2012)「한국의 일본어교육 연구 현황과 과제」『日本学報』91 韓国日本学会 pp.9-23
- 이동주·Misook Kim(2020)「코로나19 상황에서의 대학 온라인 원격교육 실태와 개선 방안」『멀티미디어 언어교육』23(3) 한국멀티미디어언어교육학회 pp.359-377
- 趙南星(2019)「日本語教育研究の現状と展望」『日本語学研究』59 韓国日本語学会 pp.101-125
- 学会誌委員会編集担当委員(2012)「【特集】学会誌の回顧と展望－学会誌50年の記録」『日本語教育』153 日本語教育学会 pp.71-80
- 喜連川優(2020)「NII Interview『ハイブリッド』が新常态に、対面と遠隔の利点を生かせ－オンライン授業の経験をサイバーシンポジウムで共有」『NII Today』88 国立情報学研究所 pp.2-5
- 齊藤美保(2016)「シャープがハマった『VUCA時代』の罟」日経BP電子版  
<https://business.nikkei.com/atcl/report/16/050200038/050200002/> (2020年12月10日検索)
- 鈴木克明(2006)「IDの視点で大学教育をデザインする鳥瞰図：eラーニングの質保証レイヤーモデルの提案」『日本教育工学会第22回講演論文集』日本教育工学会 pp.337-338
- 當作靖彦(2019)「21世紀の日本語教育の新しい方向性－ツールとしての日本語教育から地球市民育成の日本語教育」『韓国日語教育学会第35回国際学術大会予行集』韓国日語教育学会 pp.1-8
- 西口光一(2012)「【特集】学会誌の回顧と展望「教育」分野－日本語教育研究の回顧と展望」『日本語教育』153 日本語教育学会 pp.8-24
- 早矢仕智子(2017)「日本語教育研究の現状と展望」『日本語学研究』51 韓国日本語学会 pp.67-77
- 古川雅子(2020)「オンライン授業の歴史と現状－新たな学びのかたちを拓く」『NII Today』88 国立情報学研究所 pp.16-17
- 三井一希・戸田真志・松葉龍一・鈴木克明(2019)「SAMR モデルから考えるタブレット端末を用いた授業の現状分析」『日本教育工学会 2019年秋季全国大会』日本教育工学会 pp.39-40

## &lt;요지&gt;

## 일본어교육연구의 현황과 전망

본고는 한국에서의 일본어교육에 관한 최근 연구동향을 살피고 전망하고자 한 리뷰 논문이다. 우선 2019년부터 2020년에 걸쳐 일본·일본어 관련 학술지 19종에 게재된 논문 중 일본어교육연구논문 321편을 선정하고, 주제에 따라 10개 분야 및 하위 분야로 나누어 연구동향을 개관하였다. 그 결과 교수·학습(24.9%)과 언어요소(20.9%)에 관한 논문의 비율이 가장 높게 나타났고, 이어 사회언어·문화(9.0%), 교사·학습자(8.7%), 습득·오용(8.1%), 언어기능(7.2%), 교과서·교재(5.9%), 기타(5.9%), 일본어교육 일반(5.0%), 평가(4.4%)의 순으로 나타났다. 그중 일본어교육을 포함한 교육계에서 주목받기 시작해 앞으로 그 중요성과 필요성이 더욱 커질 것으로 전망되는 ICT활용·온라인수업에 관한 연구에 초점을 맞춰 그 현황과 과제에 대해 상세히 살펴보았다. 이러한 결과가 급변하는 교육환경하의 일본어교육·연구의 나아갈 방향, 수업디자인 및 실천방안 등을 모색하는 데 일조할 수 있기를 기대한다.

논문분야: 일본어교육

키워드: 현황과 전망, 일본어교육, 교수·학습, 온라인수업, 정보·통신기술

## ■ 김지선(金志宣)

이화여자대학교 교수

jiskim@ewha.ac.kr

|        |         |     |     |
|--------|---------|-----|-----|
| ■ 投稿日  | : 2020년 | 12월 | 31일 |
| ■ 審査開始 | : 2021년 | 1월  | 12일 |
| ■ 審査完了 | : 2021년 | 2월  | 15일 |
| ■ 掲載確定 | : 2021년 | 2월  | 16일 |